

8. 観光学的研究

サステナブル・ツーリズムの視点からみた ピラミッド遺跡観光に関する一考察

世界遺産「メンフィスとその墓地遺跡－

ギザからダハシュールまでのピラミッド地帯」観光に関する現状と課題

高梨 洋一郎*

1. はじめに

海外から殺到する観光客でエジプト観光は好調な伸び率を保っている（2011年1月下旬の騒動以前）。特にカイロからルクソール、アブ・シンベルにいたるナイル流域の古代エジプト観光の人気はいずれも高く、ピーク時は航空座席やホテルの客室不足が恒常化するなど、観光産業は有望な売り手市場となっている。しかし、観光客の急増に観光地のインフラ整備が追いつかず、しかも「サステナブル・ツーリズム（Sustainable Tourism＝持続可能な観光）」の視点から見た場合、団体客頼みの観光体制に幾つかの懸念材料も見えている。個人旅行を主体とした成熟型観光マーケットへの対応を図ることによって、ピラミッド観光へのリピーター増に繋げると共に、周辺地域の生活環境改善に繋げる新たな対応策が必要であろう。

2. 成長を続けるエジプト観光

日本をはじめ世界各地からの観光客増でエジプト観光が高い伸び率を保っている。1997年のルクソールで起きたテロ乱射事件や米国での9.11同時多発テロ事件で一時低迷を余儀なくされたものの、エジプト観光はいずれも比較的短期間にダメージを回復、リビア等の一部隣国からの特定入国者を除く外国人観光客は、年間860万人（2005年）と好調（Table 1）で、「石油、スエズ運河通行料、外国への出稼ぎ労働を加えた4大外貨収入産業のうち、72億ドル（2006年）と近年はトップを争う位置を占めるまでになってきている」¹⁾。好調さが続く2008年は、外国人観光客年間1000万人の大型観光地の仲間入りを果たすのも確実視されている。

Table 1 エジプトへの国際観光客

年	万人	伸び率指数
1990	456	100
1995	550	121
2000	689	151
2001	688	150
2002	709	155
2003	697	153
2004	766	168
2005	808	177

* サイバー大学世界遺産学部教授

エジプト政府は、観光産業を国の重要産業と位置付け、2011年には1400万人の規模にしようと、観光産業の規制緩和も含め、積極的な施策を進めている。こうした措置に関して、現地では次のような意見を聞くことが出来た。

「少ない日本からの直行便は大手旅行会社を買占められ、カイロ/ルクソール/アブシンベルの人気旅行を企画することは殆ど不可能になった。砂漠のオアシス地帯をランドローバーで巡るなどリピーター狙いの企画を考える以外になくなった」²⁾。

「テロ直後は、エジプト政府の観光規制緩和措置でホテルやナイルクルーズのオーバー・キャパシティ（供給過剰）現象が心配されたが、世界から殺到する観光客で最近ではかえって一室を争う供給不足が恒常化している」³⁾。

Table 2 エジプト観光の推移

	1996年	1997年	1998年	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年
観光客数(万人)	390	400	350	480	550	460	520	600	810	860
宿泊数(万泊人)	2400	2700	2000	3100	3300	3000	3300	5300	8200	8500
観光収入(億ドル)	32	37	25	38	42	37	36	44	60	68
ホテル収容人数(千人)	71	75	80	92	112	120	129	137	148	170
旅行会社数(社)	816	841	890	959	990	1018	1048	1083	1083	1191
公認観光ガイド数	4676	4887	5223	5779	6052	6407	7168	7869	8505	8505

*ルクソールテロ

*米9.11同時多発テロ

エジプト観光省の数字(Table 2)はいずれの指標とも、エジプト観光の好調ぶりを裏づけている。

9.11テロのあとも、エジプトのリゾート観光地シナイでは2004年から2006年にかけて毎年のように観光客を狙ったテロ事件が起きているが、いずれもエジプト観光全体への影響は軽微に終わっている。これは、ルクソール事件以後一段と観光警察(Tourism Police)が増強されるなど、治安対策の成果も大きいと推定される。いずれにしろ、イラクをはじめとするアラブ地域の政治的な不安定さはあるものの、ことエジプト観光に関していえば、ナイル流域の古代エジプト観光にしろ、シナイ半島のリゾート観光にしろ、観光業界関係者はいずれも当面の間堅調な伸びを続けてゆくものと期待している(Table 2)。むしろ、問題はそのままの堅調な観光の伸びを、地域振興に活かし、長い目で見たサステナブル・ツーリズムに繋げてゆくことが出来るのかどうかということである。というのも、余りにも極端な団体依存型観光が、現地に利益を与えず、騒音や環境破壊という負の遺産だけを残してゆく、消費型マスツーリズムに繋がりがかねないからだ。

すでに、古代エジプトの遺跡観光ではルクソールにおける岩窟墓の観光に規制が敷かれ、シナイのリゾート地での環境汚染調査などが進められているが、カイロ周辺のピラミッド群遺跡観光でも、遠からず環境破壊は現実の問題とならざるを得ないと思われるからだ。ここでは断片的ながら、サステナブル・ツーリズムの視点からみた課題について考察してみたい。

3. 21世紀型観光はサステナブル・ツーリズム

1992年の南米リオデジャネイロでの「観光と開発に関する国連会議」(地球サミット)をきっかけに観光の分野でもサステナブル・ツーリズムが、世界的な潮流となってきた(Table 3)。

Table 3 略年表

1992年	国連世界環境開発会議(地球サミット)で「環境と開発に関するアジェンダ21」の採択
1995年	WTTC(世界観光委員会)、UNEP(国連環境計画)などによる「観光のためのアジェンダ21」の策定
2002年	国連エコツーリズム年の制定

観光マーケットの需要サイドに軸足を置いて観光資源の活用を考える従来型観光（Conventional Tourism）に対し、観光資源の持続的な活用と保全を前提に観光を推進するサステナブル・ツーリズムや、さらにそれを生態的に保全しながら活用しようというエコツーリズム（Ecotourism）は、つまるところ基本的に地域住民による資源の活用と保全が前提である（Fig.1）。

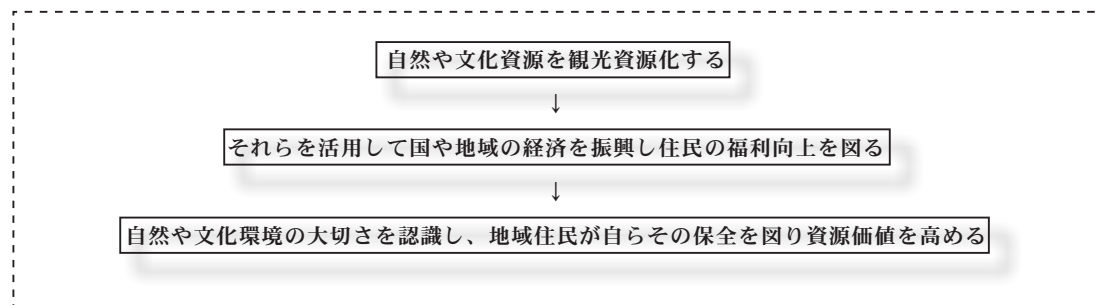


Fig.1 地域住民による資源の活用と保全のサイクル

このようなサイクルによって、世界遺産に代表される自然・文化資源を護り、貧困からの脱出を図るため、観光という手段を活用しようというのが、近年世界的に注目を集め始めているエコツーリズムやサステナブル・ツーリズムという観光の考え方である。市場の需給のメカニズムに任せ競争原理によって観光産業の量的拡大を図るマスツーリズムに対し、資源価値を損なわないよう一定の規制を行い、資源の破壊や劣化に繋がらないよう保全のメカニズムを組み込んでゆこうとするのが、サステナブル・ツーリズムの基本概念である。いわば一種の管理型観光である。

1980年代後半から90年代にかけ、行過ぎた観光開発や地球環境の劣化が大きな問題として脚光を浴びるにつれ、これからの観光の主流はサステナブル・ツーリズムやエコツーリズムであるとの認識が高まり、それが2002年の国連エコツーリズム年制定に繋がっている。

以下では、以上のような視点から、すでにマス型観光地のひとつとして膨大な観光客を受入れている古代エジプト遺跡群のうち、今回ほぼ20年振りに現状視察を行ったカイロ地域のピラミッド観光における課題の一端について考察を行う。

4. ピラミッド遺跡観光の保全と整備について

巨石を積み上げ衛星からもその正方錐形がくっきりと見えるピラミッドの存在感は、何度見ても圧巻である。

急増する内外からの観光需要に応えて、構内道路の整備や駐車場の設置、住宅地との間における緩衝地の設営、さらには観光警察官の増員などといった諸対策が行われ、最低限のインフラは整い始めている、というのが第一印象である。加えて4500年の歴史に耐えてきた堅牢な石積みの建造物群は木造建造物などと違って自然環境の変化に強い。このため、観光客の急増にも関わらず、表面上大きな劣化はみられない。損傷状態が容易に判別できる木造建築物と違い、石造建築物であるピラミッドの観光では禁止区域への観光客の立ち入りや観光地特有の落書きが気になる程度で、まだそれほど深刻な問題とはなっていないように思える。むしろ気になるのは、構内のスポットをより深く理解するための情報や順路表示が一切設営されていないなど、個人観光客にとっては必須条件ともいえるべき観光インフラが整っていないことである。これは裏を返せば、古代エジプト人達によって建造されてきたいわば先人達の偉業を誇り大切にしようというメッセージの欠如と捉えられかねない。

観光スポットの説明から旅行中の行動まで全てガイドまかせという団体旅行は、ホストである受け地側にとって手間がかからず効率がよい。しかも、観光客の多数確保は、一部の観光業者にとっても都合がいい。しかし、一方ではテロなど事件が起こったときに弱いのも団体旅行偏重型である。というのも、安全面で懸念があれば経営リスクを考え旅行会社は一斉に手を引くからである。持続可能な観光を構築するためには、需要の下支えとなる個人観光客がどうしても必要である。ピラミッド観光にはまだそのインフラができていない。今回視察を行ってまず共通して目についたのは、個人観光客向けの施設が未整備に近いことだった。

5. ギザのピラミッド

クフ王、カフラー王、メンカウラー王の3基からなるギザのピラミッド群は、何度見ても驚嘆の一語に尽きる必見の観光スポットである。そして、現地を実際に訪れて観光客が一様に驚くのが、ピラミッド群が砂漠の中にそそりたつ写真のイメージとは異なり、東側が住宅地に隣接して建っていることだ。そのため、20年前に訪れた時は、そのまま推移すればやがて生活圏の膨張によって遺跡群の破壊が進むのではないかと危惧したが、今回は宅地化の進行を食い止めるための緩衝地が築かれるなど、いくつかの点でその保全のためのインフラ整備が進められていることを見、一応の安堵感を得た。しかし、未だ課題も少なくない。下記に示すのはその一例である。

(1) 雑然としたゲート周辺の施設と対応

テロ等への警戒のため、ゲート入口（チケット売り場）の手前に新たに観光警察によるチェック・ポイントが設けられていた（Fig.2）。観光バス等の車両は許可書を提示して構内の駐車場へ入っていたが、徒歩による観光客は簡単なチェックを受けるだけで、チケット売り場に向かっていった。ゲート前の商店街は土産物屋を主体に相変わらず交通量が多く雑然としたままだった。正面に位置するファーストフード店からの眺望が、唯一廉価に食事をしながらピラミッド観光を楽しむポイントとして、内外の観光客で賑わっていた。スフィンクスとピラミッドをバックに毎夜開かれる「音と光のショー」は年間32万人を数える人気イベントとなっている。

(2) ひと工夫欲しい構内見学施設の整備

先述した「音と光のショー」を対象としたレストランを除いて、構内の休憩・飲食施設は全くない。このため、団体観光客は食事時を避けて見学、個人観光客は周辺のレストランや高級ホテルで食事を摂ることになる。従って、ギザのピラミッド見学時間は、午前と午後に分けた2～3時間となる。たっぷりと時間をかけてピラミッドを仰ぎながら悠久の時間を楽しむためには個人旅行が適している。

(3) 懸念される構内交通量の増大

クフ王、カフラー王のピラミッド付近にそれぞれ1カ所（Fig.3）、西側の砂漠に1カ所というように、構内には合計3カ所の駐車場が設けられている（尚この他敷地外に1カ所ある）。3つ目に挙げた駐車場は、20年前にはなかったもので、3大ピラミッドを眺望できる人気スポットである。車で来場する観光客は、こ

れら3カ所を順番に移動しながら観光する手順になっている。シーズン中は色とりどりの大型観光バスが終日絶えることなく20～30台駐車し、それに加えて夥しい数のマイクロバスや乗用車が観光客を運んでくる。このためファインダーに車が入らないようにピラミッド全景を撮影するのは思いのほか難しい。今後更に交通量が増えることになれば、道路や駐車場に相当の負荷がかかることは間違いない。ここは地質学者など専門家の調査が必要だが、構内の地盤構造にやがて大きな影響を与えることにでもなりはしないか気になる。しかも、ピラミッドの周囲にはまだまだ未発掘の遺跡が眠っているのではないかとと思われるだけに、構内交通量の増大が地盤にどのような影響を与えことになるのか、早目にアセスメントを行い、将来を見据えた対策を行う必要がある。排気ガスによる遺跡の劣化などを考えると、カー・フリーゾーンの設定やガソリン車の規制と電気自動車による交通システムの採用など、サステナブル・ツーリズムの視点にたった長期的な環境保全策が必要になるとと思われる。尚、考古省によるとその計画はすでに策定され、準備中のことであった。



Fig.2 チケット売り場の外側に設けられた
チェック・ポイント



Fig.3 カフラー王のピラミッド前の駐車場

(4)「太陽の船博物館」の景観

クフ王のピラミッドの南側に建てられている「太陽の船博物館」は、実に4550年前に造られたレバノン杉製、全長45mの巨大な木造船がほぼ完全な形で復元展示されたギザ台地必見の観光スポットである。発見現場の真上に博物館が建てられ、出土現場も含め見学できるようになっている。入口でのセキュリティ・チェックや靴袋を着けての見学など遺跡保存に対する一通りの配慮をしているが、これを収容した建物が背後のピラミッドにいささか不似合いである (Fig.4)。イタリア人の建築家による設計だというが、背景のピラミッド遺跡群に溶け込んでいないように思われる。ギザの入場料1000円 (50L.E. = エジプト・ポンド (2008年当時)、以下同じ) とは別に、外国人一人当たり800円 (40L.E.) の入館料を追加徴収しているが、もう少し景観美に配慮する必要があると思われる。

(5) 急ぎたい個人観光客向けのインフラ整備

観光客向けのサービスに目を向ければ、観光のベース基地となる観光センターがなく、年間訪れる500万人の観光客に対して構内のトイレが数カ所だけというのも、インフラ整備にまだまだ改善の余地があるであろう (Fig.5)。それも男女それぞれに2カ所が用意されているのみである (使用料1L.E. = 約20円)。今回、合計3回にわたる視察で注意して観察したところ、使用待ちで列をつくっている様子もなかったから、団体

客はバスの中か予め見学前に済ませてくるのだろう。いずれにしても団体、個人旅行者を問わずゆったりと観光できるようにすべきだろう。

また、構内に順路表示はなく、遺跡の説明パネルや構内マップ等の表示もみられない。観光客は持参のガイドブックを参照するか、ガイドの説明を聞かなければピラミッド遺跡建設の背景やナイル川とのかかわりなどを理解するのも難しい。入口で簡単なリーフレットすらが配られていない。つまり FIT（個人観光客）向けのサービスはほぼみられないといっている。

ギザの遺跡入場料は一人 1000 円であるので、外国人観光客だけでも単純にみて年間 33 億円を稼ぎだしている計算になる。せめて構内の順路表示や簡単な説明くらいは必要であろう。可能ならピラミッド観光の総合的な展示を兼ねたビジター・センターでもあれば観光客向けのサービスにもなり、地域住民の雇用創出にも繋がるはずだ。観光資源を上手に運用して資金を稼ぎだし、それを資源の保全や地域の福利厚生につなげて行くのが、サステナブル・ツーリズムの基本的理念だが、ここにはまだその気配さえない。



Fig.4 「太陽の船博物館」周辺の景観と駐車場



Fig.5 整備の必要なトイレ

(6) 遺跡の保存

97年に起きたルクソールにおける外国人観光客を狙ったテロ事件以来、観光スポットには観光警察が一挙に増員されたためもあるのだろうが、ギザのピラミッドにも監視の目が大きく向けられるようになった（Fig.6）。このためもあるって評判の悪かった悪質なラクダ乗り観光や強引な物売りの姿はかなり少なくなった（あくまで印象の範囲内だが）。個人客でも安心して気ままに観光できるのは、観光地の質の向上につながるだけにこうした改善は実に嬉しいことである。

観光公害から遺跡を護るため、クフ王の玄室部分を除きピラミッドの周囲は全て柵やテープが張り巡らされて進入禁止の措置がとられているが、それでも監視の目を盗んだ落書きや登頂が後を絶たない（Fig.7）。「登頂禁止」の看板を無視しての写真撮影はいたるところで見られる。

ギザのピラミッド群は、ナイル河畔に繋がる東側が住宅地に隣接しているため、以前に訪れた時も気になっていたポイントの一つであったが、今回は東南側のイスラム墓地も含め塀がはりめぐらされ、ぎりぎりながら緩衝地帯が構築されていた（Fig.8）。

クフ王の玄室観光は、湿度等によるオーバーユースを避けるため、午前午後それぞれ 150 人までの完全予約制（他に旅行会社に割り当てている団体枠もあるようだ）となっている。このクフ王の玄室観光だけで 1 回 100 L.E.（約 2000 円）の高額な入場料を課しているが、それでも殺到する予約客を捌ききれないほどの



Fig.6 自動小銃を構えて警戒する観光警察



Fig.7 登頂禁止の注意書きを無視する観光客

人気である。利用料金を高額化することによってオーバークースを避けるのは、サステナブル・ツーリズムのひとつの手法であるが、問題はそれで得られた収入を本来の資源保全のためにきちんと回す仕組みがつけられているかどうかである (Fig.9)。

ギザをはじめエジプト考古庁の管理となっている古代エジプト遺跡群によってもたらされる観光収入は、特別会計ではなく全額一般会計扱いの国庫収入になっていて、直接遺跡の保全対策には資金が回ってこないと聞いた（ただし、この情報は未確認のため詳細について今後調べたい）。観光収入の一部はそれを稼ぎ出している観光資源の修復や保全、そして可能なら地域住民への利益に還元される仕組みに繋げてゆくのが、サステナブル・ツーリズムの代表であるエコツーリズムの基本的な考え方である。



Fig.8 迫る住宅地との間に築かれたフェンス



Fig.9 スフィンクス前の気になる湧水溜

外国人観光に比べ、エジプト人による国内観光の占める割合は、最大の観光地であるギザのピラミッドでもまだ全体の4分の1と小さい (Table 4)。このため、他の古代エジプト遺跡観光と同じくピラミッド観光も、まだ暫くの間、団体外国人観光に依存せざるを得ないというのが実情であり、それを抜きにしてエジプトの観光産業は成り立たない。自国民を相手にした国内資本による観光産業によって地域の活性化につなげて行くエコツーリズム型の観光開発はまだまだ実現には程遠いと言えそうだが、せめて外国人観光だけでも特定の旅行会社に集中しがちな団体旅行偏重ではなく、個人観光客の比率がもう少し高まれば、それら単独行動型観光客の増大による地域社会への経済還元はもう少し期待できることになると思われる。地元の小資本型観光産業に広くお金を落とすのは、こういった個人旅行者群である。

それにもかかわらず、未だギザに向かう沿道沿いの環境整備はほとんど進んでいないのが現状である。ピラミッド観光で得られる収入の一部でも、こういった沿道の環境整備に結びつけるのが急務であろう。現在のピラミッド観光は、まだ地域社会や沿道の村や町が置き去りのままの飛び地観光である。いわば点としてのスポットだけが栄えるテーマパーク型観光地である。

Table 4 2005 年の主要観光スポットへの訪問者数（「エジプト内務省観光考古警察署調べ」より）

	外国人	国内
エジプト考古学博物館	1,678,203	331,222
カイロ全域	4,217,547	1,319,887
ピラミッド群	1,716,364	781,865
音と光のショー	320,579	1,818
ギザ	3,323,160	861,400
サッカラ	658,484	19,096
ダハシュール	107,956	611
ルクソール	4,693,314	295,233
アスワン	4,770,832	358,385
アレクサンドリア	526,091	477,765
南シナイ	396,162	42,804

6. サッカラのピラミッドと墓地群

ギザのピラミッドに続き人気の高いサッカラの階段ピラミッドは、年間 70 万人（Table 4）の観光客が訪れるカイロ周辺の代表的な観光地である。

カイロ市内から南南西に車で 1 時間弱の距離にあり、運河に平行して走る街道沿いは、椰子林が茂る農業地帯である。

沿道に沿って団体観光客相手のカーペット工場が目立ち始めたと思ったら、そこがサッカラへの入口の村だった。かつてナイル川の氾濫が 1 年に 1 回恵みの水を運んでいた時は満々と水をたたえ静脈の役割を果たしていた運河は、必ずしも整備されていないと言える。

サッカラの村は、階段ピラミッドで名高い一大観光地とは無縁の佇まいである。村はずれに観光警察官など数人が詰めているピラミッド・エリアへのゲートがあり、そこから 2km ほど入ると正面入口に辿りつく。ジェセル王の階段ピラミッドまでは更に 1.5km と敷地は広大である。

階段ピラミッド入口の駐車場には、ドイツ、イタリアなどの表示に混じって中国人グループ 2 台、日本人グループ 1 台など合計 10 台ほどの大型観光バスが駐車していた（Fig.10）。乗用車やマイクロバスの個人旅行者はここに於いてもごく少数である。

ピラミッド建築の原型といわれる階段ピラミッドを中心に葬祭殿やマスタバと呼ばれる石積みの墳墓、セケムケト王の未完成ピラミッド及び参道跡などが広大な敷地に点在する遺跡群の観光は、知的好奇心をくすぐるものである。ただマップや順路表示、案内看板の類が少ないことから、ガイドだけがたよりとなる。頼りになるガイドブックが現地では正規な手段で手に入らないのも痛い。「メレルカのマスタバ」の壁面の彫刻は 4600 年前の色彩を今に留める精巧さで、それだけでもゆっくり見学したら小一時間は欲しいところだが、解説がないと僅か数分間で素通りしてしまう。ガイド付きの団体観光客の場合も大半がスケジュールに追われているようで、一通り概観して確認するだけで精一杯のありさまだ。もし、リピーターとしてゆっく

り再訪したくても、詳しい情報がなければ計画さえ立てられない。折角の観光資源が活かし切れていないというのは、古代エジプト遺跡観光共通の課題でもあるのだろうが、残念なことである。

葬祭殿跡や見学コースの階段が狭く観光客は肩を擦れ合うように交差していたが、階段でも踏み外せば事故に繋がりがねないところが数ヶ所ある (Fig.11)。導線がないために観光客はそれぞれ勝手に動いて、ところどころで渋滞をつくっている。せめて一方通行にするか、順路の表示だけでもすれば混雑はもう少し緩和する。サステナブル・ツーリズムはキャリング・キャパシティをどう護るかが生命線だが、単に収容人数を規制するだけでなく、上手なサイト・マネージメントをすればキャパシティを増やすこともできる。収容力といえば、ウナス王のピラミッドは、内部見学が出来るものの、一度に収容できる人数が限られているため、



Fig.10 終日 10 台程度のバスが停車する入口前の駐車場



Fig.11 立ち入り禁止区域に入る観光客達

自ずと制限がかかるので、今のところ心配はないようだ。

ピラミッド遺跡群のうちサッカラには見学者用のセンターが建てられている (Fig.12)。2006 年にオープンしたイムヘテブ博物館、映像センター、カフェテリア、そして最近オープンしたばかりの土産店などからなっており、見学者は休憩を兼ねて古代エジプト時代の情報を収集したり、ちょっとしたショッピングを楽しむことが出来る仕組みになっている。他のピラミッド遺跡ではこういった総合的な観光センターが皆無なだけに画期的なことだといえる。ただオープン間もないこともあって、レストランのメニューひとつとっても有名ホテルのメリディアンが経営している割には、軽食程度でしかなく内容にはまだ問題がある (Fig.13)。古代エジプトをモチーフにした伝統料理を楽しみながら伝統舞踊を楽しめるようにでもなれば、観光客にとって格好のエンターテイメントになるだろう。そのことが、地域住民の雇用創出にも繋がるはずである。



Fig.12 博物館を備えたビジターセンター



Fig.13 センター内にあるメリディアン経営のレストラン

イムヘテブ博物館は、サッカラのジェセル王の階段ピラミッドを設計した建築家イムヘテブの功績をたたえて命名されたもので、展示物の数は決して多くないが良質のものが少なくない。ただここも案内用マップどころか、英文のパンフレットも手に入らないのには驚いた（しかるべきところに依頼すれば入手可能だとも聞いたが、入口の係官は把握していないようだった）。展示物にはそれぞれ英文による説明板が付けられていたが、やはりゆっくり見学するには説明が欲しい。ここでもビジターへのサービスはほとんどみることが出来ない。サッカラへの入場料 500 円とは別に博物館への入場料 500 円を徴収しているだけに、もう少し観光客への配慮が欲しいところである。

7. メンフィス

古代エジプト古王国時代の最初の首都が置かれたメンフィスは、歴史的に重要な役割を果たしてきた古都で、サッカラ観光コースのひとつになっている。古都といってもラムセス2世の巨像で名高い野外博物館が唯一観光スポットとなっているだけで、他は殆ど未発掘のまま（イギリス隊により発掘中）であるため、やや不満が残る（Fig.14）。

ルクソールをはじめラムセスⅡ世像はいたるところで見かけることができるが、足の一部が欠けているだけでほぼ完璧な形で残っているのは珍しく、大きさもかなり大きい（Fig.15）。目玉であるこの巨像のほかに、屋外に展示されているスフィンクスなどを見学し、軒を連ねる土産品店を覗く1～2時間位の観光コースだが、ここには遺構ごとに英語による簡単な説明表示板があった。珍しいケースだ。ただ木製のため痛みが激しく、かつ手入れが行き届いていない。入場料 30L.E.（600 円）。



Fig.14 清掃が行き届いた野外博物館



Fig.15 ほぼ完全な形で残るラムセスⅡ世の石像

8. ダハシュール

ダハシュールのピラミッド群は、サッカラの南、直線距離にして僅か2kmの位置にあるが、道路を迂回しているので、30分くらいはかかる。

この目玉は、「赤ピラミッド」と「屈折ピラミッド」の2基で、1996年10月になって初めて一般公開されることになった。年間20万人足らずとまだ観光客数も少なく、日本からのツアーでもダハシュールまでを丁寧に見せるツアーはまだ少ないようである。

ただ、この二つのピラミッドは、ピラミッドの建築史を理解する上で欠かすことの出来ない重要なもの

だということだけでなく、土木工学の観点から見ても興味深い。サッカラにはじまったギザ以前のピラミッド群が、時代を重ねながら階段状のピラミッドからあの完成されたギザの真正ピラミッドにどのように結実していったのかは、ピラミッド観光における見所の一つである。二つのピラミッドを比較しながら観光するのもいいだろう。

また、「赤ピラミッド」は、ギザのクフ王と違って今のところ玄室が無料で見学できるので、ギザで体験できなかった観光客にとっては格好のチャンスを提供してくれている (Fig.16)。観光客が増えれば、オーバーユースを避けるため何らかの規制が必要になるだろう。

この日も日本人グループを含む2台の大型バスが来ていたが、この他はマイクロバスと乗用車が中心だった (Fig.17)。オーバー・キャパシティによる遺跡への損傷はまだ目立たないが、逆に観光客用の施設としては、トイレが一カ所だけという状態だった。ここでもインフラは個人観光客にとって絶望的な状況だったといえる。ここではむしろトイレの不備が、最大収容能力を広げてゆけない大きな要因とさえなっているようだ。トイレの問題に敏感な日本人シニア旅行者には、なかなか厳しいことだけは確かである。

早稲田大学のエジプト調査隊が進めているダハシュール北遺跡は、彩色豊かな木製の棺とミイラが発掘されるなど、日本はもとより世界の考古学者達の注目を集めている (Figs.18,19)。発掘現場からは今なお古代エジプト時代の遺構が次々と検出されており、将来遺跡の一部でも復元されて一般観光客に公開されるようになれば、もう1つの発掘現場であるアブ・シール遺跡 (サッカラの北側) も含めて、古代エジプトの遺跡



Fig.16 表面の化粧石が観察できる赤ピラミッド



Fig.17 大型観光バスをあまり見かけない
屈折ピラミッド周辺



Fig.18 ダハシュール北遺跡発掘風景 (1)



Fig.19 ダハシュール北遺跡発掘風景 (2)

見学の回廊が形成される可能性が生まれることになる。古代エジプト遺跡の発掘が、考古学上の偉大な功績となるばかりでなく、ピラミッド・ストーリーを形成する新たな観光素材となれば、それは結果的にエジプト経済を助け、それぞれの地域社会に経済・社会的な利益をもたらすことになることは言うまでもない。

古代エジプトの遺跡発掘ツアーは、欧米の観光客には人気が高く現在でも継続されていると聞いたが、日本人向けのものは集客に結びつかず、現在は中断している。情報が整備され、発掘現場への見学や体験が一般に開放されるようにでもなれば、古代エジプトはまた違った形で、熱心な考古学ファンを惹き付けることになるはずである。

9. アブ・ロアシュ遺跡の修復

その面でもうひとつ注目されるのが、ピラミッド群の最北にあるアブ・ロアシュのピラミッド遺跡群の修復である。ジェドエフラー王の未完成ピラミッド(クフ王の長男。次男カフラー王との抗争に破れたとされ、同地にピラミッドを構築するも治世が短かったため、途中までの建造となる)で、ギザのピラミッドに隣接して北側にある。未完成で終わったために玄室部分が露天掘りのように上から眺望でき、ピラミッドの構造を知ることができる貴重な遺跡だ。墳墓群の発掘同様、研究者や熱心なピラミッド・ファンにはたまらないものだといえるだろう。

また、丘の上に位置する遺跡からはパノラマのように眺望が楽しめ、ギザのピラミッド群やはるかナイルの方向を見下ろすことができる (Fig.20)。エジプト政府は、3年以内にアブ・ロアシュの修復を終え、数年内に予定しているエジプト考古学博物館の新築・移転と併せ、古代エジプト観光の回廊を完成させる予定だという。考古学を研究する学生や古代エジプトに強い興味を持つものにとって、これまで遺跡ごとに点々で行われてきたピラミッド観光が、全体を1つのストーリーとしてとらえるような試みは有益であり、期待するところ大である。

ただ、そのためにも以上述べてきたように、ピラミッド観光がそれぞれの周辺地域に経済的社会的メリットをもたらすことができるよう、サステナブル・ツーリズムへ向けた取組みとそれを実現するための古代エジプト観光の戦略づくりが必要である。



Fig.20 上から眺望する玄室部分の眺め

10. まとめ

以上は、殆どが外見の観察に基づく印象と関係者からの補足情報のみによる、視察記である。しかも短期

間の観察であるため、「ピラミッド観光の現状と課題」を総合的に論じるうえでは、その参考意見のひとつに過ぎないものになってしまった。遺跡観光による収入と保全や修復への還元がどのように行われているのか、その一端さえ不明の状態では、サステナブル・ツーリズムの視点からみたピラミッド観光を論じることは難しいと言えよう。

ただ、エジプト考古学博物館の新築移転や「太陽の船博物館」の移転、アブ・ロアシュのピラミッド遺跡群の修復による「ピラミッド観光回廊」の整備、さらには2009年から本格化する「第2の太陽の船発掘修復プロジェクト」などにより、ピラミッド観光は総合・統合化に向かって新たなスタートを切ることが期待されている。そのことによって、ピラミッド観光は、収容力の向上と共に内外からの観光客が一段と増大し続けてゆくものと予想されているが、肝心なことは5000年に及ぶ人類の遺産を後世に繋げるためにも、サステナブル・ツーリズムの視点に立った観光のインフラ整備と遺跡の保全を併せ推進するための総合的な政策を立案・実施することが必要である。

註

- 1) 現地旅行会社幹部による。
- 2) アフリカ観光の専門旅行会社、道祖神の熊沢代表取締役社長による。
- 3) 中野パヒ・トラベル・エージェンシー総支配人による。